

エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界 (その6 悪さをする「蚊」の音楽)

昆虫芸術研究家

柏田 雄三 (かしわだ ゆうぞう)

蚊が人に与える害には直接の吸血に加え、飛びまわる音で人をいらだたせることや様々な伝染病を媒介することがある。蚊を題材とする少なからぬ曲の中で作曲家はどのようなことを表現したのだろうか。

まず吸血に関する曲について記そう。イタリアのカルロ・ジェズアルド (1566～1613) に《この大胆な蚊が》という名前の曲がある。「美しい彼女の可愛い胸にかみついた蚊が戻ってきて殺される。私もあなたにかみついて、その胸で死にたい」という歌詞は普通ではない。不貞の妻への報復殺人は中世以降のイタリアの貴族階層では珍しくなかったらしいが、ジェズアルドはそれを地で行って夫人をその愛人とともに殺し、一説では子供の出生までも疑って殺害に加担したと言われた人物であったから、このような歌詞は驚くに値しないのかもしれない。この興味深い曲はCDだけでなく、コンサートでも聴くことができた。チェコのレオシュ・ヤナーチェク (1854～1928) のオペラ《利口な女狐の物語》には様々な動物が登場し、蚊が森番の血を吸う場面がある。NHKの「みんなのうた」の童謡《ドラキュラのうた》は小黒恵子が蚊を吸血鬼に見立てたユーモラスな詩を寄せた曲である。

蚊が飛び回る様子の曲に移る。数が多いので作曲者と曲名にとどめる。フランスのメル・ボニスのピアノ曲《蚊》、デンマークのヘンリックのリコーダー曲《蚊の踊り》、デンマークのランゴアのピアノ曲《インセクタリアウム》の《蚊》、ハンガリーのバルトークのヴァイオリン曲《蚊の踊り》、ロシアではスクリャービンのピアノ練習曲《蚊》、リヤードフのピアノ曲《蚊の踊り》、ムソルグスキーのオペラ《ボリス・ゴドゥノフ》の《蚊の歌》等である。以前読んだ嫌いな音のアンケートでは黒板をひっかく音、ガラスをひっかく音等に続き蚊の羽音も挙げられていた。蚊の曲には音の様子を忠実にあるいはユーモラスに再現する曲に加え、このようないらさらさせる様子を表した曲も含まれている。

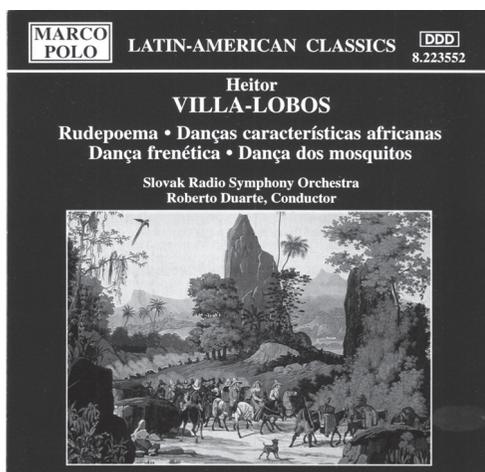
ブラジルのエイトル・ヴィラ＝ロボス (1887～1959) の《蚊の踊り》もトランピエール飛ぶ様子を表した規模の大きい管弦楽曲である。

マラリアなどの印象から蚊は特に熱帯で問題となる虫だと思われがちだが、アラスカ、シベリア、北欧では大きな蚊が大量に発生して人間や動物に襲いかかるそう。そのことはドキュメンタリー番組で目にするし、椎名誠著の「蚊学ノ書」にも詳しく書かれている。

蚊が媒介する病名の曲には、フランスのアルテュール・オネゲル (1892～1955) の歌曲《黄熱病》がある。CDが見つからないので楽譜で調べると病気を歌ったのではなく、恋の曲のようである。黄熱病やマラリアの発生のため工事が難航したパナマ運河開通の1914年にはこれらの病気が蚊の媒介によることが明らかになっていたそうだから、1935年作曲の《黄熱病》が病気のことを歌った曲でないのは惜しい気がする。

アルゼンチンのフォルクローレの巨星アタウアルパ・ユバンキ (1908～92) の《神についてのささやかな問い》ではマラリアが神にも見放されるほど貧しい男の象徴として歌われている。

最後に曲名ではないが、日本の「THE BACILLUS BRAINS (THE 日本脳炎)」というロックバンドの名前を記しておこう。



ヴィラ＝ロボス 蚊の踊り
MARCO POLO 8.223552